

空は赤らみ始めて、柔らかな夕日が降り注いでいる。

フェイトは長く伸びた影を引きずりながら、大通りを歩いていった。

学校の帰りだ。今日は何もない。帰ってゆつくりと休める。

ご飯を食べて、ゆつくりと風呂に入って、ベッドに転がり込みたい。

角を曲がると、自宅マンションが窺えた。夕日を浴びて煌いている。

そこで彼女は立ち止まった。

人通りはないし、行き交う車もない。まるで街全体が死んだかのように、静まり返っていることによく気がついた。

フェイトは小首を傾げた。いつもなら人通りがもっと多いはずであった。

彼女は近くにあったコンビニに惹かれるようにして入った。

蛍光灯が狭い店内を照らしている。何本かの電燈は寿命であろう。頻繁に明滅している。夕方の混み合うはずの時間帯であるが客は一人もいない。無愛想な店員がカウンターで立

っているだけだ。

閑古鳥が鳴いている店内に、最近流行の歌手のポップ曲が流れている。

フェイトは奇妙に思いながらも店内を見廻した。店員と視線が合った。彼は猜疑を込めた冷たい視線で彼女を射抜いた。得体の知れぬ怖さを感じ、フェイト思わず胴震いした。

嫌な店だと思つて、彼女は逃げるようにして店を出た。

奇妙に思いながらも彼女は帰宅を急いだ。

ふと、フェイトは十字路に立ち尽くしている少女に気がついた。

明るい栗色の髪が美しい少女だ。フェイトの顔が綻んだ。

その少女の名を呼びながら、駆け足で近付く。

彼女はゆっくりと振り向いた。そして、フェイトが彼女の体に触れると同時に、その少女は崩れた。手足がさらさらと崩れていき、すぐに胴体と顔も崩れていく。

体も服も全部が砂となった。その場に巨大な砂山ができた。

フェイトは呆然とし、喉を潰されたように言葉を失った。

しばらく立ち尽くした後、我に返ると砂をかき集めた。掌一杯に砂をすくい、それを固めようとする。しかし、砂になった以上、それが元通りになるはずがない。

突風が路地に吹いた。砂がそれに乗って、舞っていく。

フェイトは涙を流して、

「待つて！ 行かないで！」

と叫びながら、飛ばされていく砂を抑えようとするも、無駄な努力であった。風が止むと、そこには何もなかった。

この世の全てが終わったような調子で、悲鳴をあげた。

「なのは！」

布団を蹴飛ばすようにして、飛び跳ねるようにして起きた。

そして、辺りを見廻す。見慣れた自室であった。

おかしい。さっきまで路地にいたではないか。そう思いつつ、フェイトはもう一度辺りを見廻した。

窓の外を見遣った。外は既に明るい。都心の高層ビル群が朝日を煌びやかに跳ね返し、黄金色に染まっていた。

ようやく、フェイトは自分が夢を見ていたのだと悟った。悪夢を見るのは久しぶりだ。実に二年振りのことである。

胸糞が悪くなる夢だ。

起きるにはまだ早い時間であったが、ひとまずフェイトはベッドから這い出すようにして起きた。

机にある写真立てが倒れていることに気がついた。それを起こすと、なのはとフェイト

が仲良く並んだ光景が目飛び込んだ。

心臓がきつく締め付けられるような感じを覚える。

フェイトは表情をきつと固くして頷いた。

（――絶対に助けるからね。なのは……）

## 五

終業間際から徐々に弛緩し始めていた空気も、チャイムが鳴ると、堤が破れたかのよう  
に一気にだらしないものとなった。

部活がある者は部活へ、そうでない者は早々に帰宅の途に着く。だが、一部の者には間  
屋がそう卸さない。掃除当番がある。

そして、フェイトはその当番であった。

彼女は面倒臭そうに箒ほうきを右へ、左へ掃いて、ゴミを集めていく。  
(こんなことしている場合じゃないのに)

フェイトはすぐに本局に行きたかった。当番とはいえ、さぼりたい気分であった。本音  
を言ってしまうえば、掃除当番どころか学校もさぼりたい。

しかし、クロノヤリンディからは警務隊に怪しまれないようにということと、通常の生  
活を命じられている。

別に学校をさぼっても構わないのではないかという疑問がもたげる。

任務の関係で一週間程度、学校を休んだことは何回かあった。今回もそうすれば良いのではないか。昼間は学校、夕方ないし夜は管理局という生活を無理に送る必要はない。

事件が難航しているとでっち上げれば、何ら問題はないはずであった。

(少し神経質じゃないのかな)

警務隊の動きを、クロノは異常に警戒している。彼の石橋を叩いて渡る性格の弊害でもある。

フェイトは頭を振った。とにかく急がねば。そのような急ぎたい気持ちから、掃除も自然と投げやりになってしまふ。

そのような彼女を認めて、

「こらあ、フェイト。ちゃんと掃除する」

同じく掃除当番であったアリサが注意する。

「ちゃんと、掃除してるけど」

少しの間を置いて、フェイトがむっとして返事する。その対応にアリサは不快さを表しながらも、

「していいでしょ」

その言葉にフェイトが露骨に不快感を示した。その態度にアリサは頭に血が昇る。凄みを利かした顔で彼女に無言で詰め寄る。

「ちよ、ちよっと、二人とも、止めて」

「さすがが慌てて間に入るも、

「すぐかは黙ってて」

アリサのその一言ですぐかは押し黙ってしまった。放課後の緩んだ空気はどこへ行つたのやら。急速なガス交換がされたかのように重苦しい空気が充填し始めた。

アリサは声を低くして、

「あんたねえ、最近、やる気なさすぎよ」

「そうは思わないけど」

「あんたがそう思わなくても、傍から見ればそうなのよ」

「傍から？——それはアリサから見ただけだね。主観で言われても困るなあ。それに掃除でやる気がどうのこうの、大袈裟じゃない？」

いつもと変わらない口調で、屁理屈をこねるフェイトにアリサはますます頭に血が昇つた。

「あんたね。なのはが——休んでから、ずっとその調子よ。見てて苛々するわ」

吐き捨てるようにアリサが言うと、フェイトの瞳に怒りの炎が宿った。

「二度と言わないで」

「何度でも言つてやるわよ」

そして、お互いに押し黙ると、劍呑けんどんな空気はますます募るばかりであった。

二人とも睨み合いましたまま微動たりともしない。

「ハラオウンも高町が休んでるから苛々しているんだよ」

野次馬である男子生徒が、隣の生徒に笑いながら言った。本人にとつて囁き声のつもりだったが、その程度でも対峙する二人の耳にはしっかりと届いた。

フェイトとアリスからの殺気が籠もった視線で射抜かれると、彼は身を竦ませて笑いを引つ込めて、罰が悪そうな顔になる。そして、空気を読まなかつた発言に対する罰として、隣の女子から無言で頭を叩かれた。

ばたばたとした足音が近づいてきた。はやてであった。すずかに仲介を頼まれたのだ。はやては呆れつつも、二人の間に割って入った。

「アリスちゃんも、フェイトちゃんも、とにかく槍を引つ込めてくれへんかな」

アリスもフェイトも怒りに満ちた顔を、はやてに向ける。

二人とも怖いなあと慄きながらも、

「二人とも、こんなところでのんびりしてる暇はないんやろ？ それとも、ずっと喧嘩するほどの時間はある？」

その言葉にアリスも、フェイトもはつとした表情を垣間見せる。アリスはいつものようにバイオリンスクールがあるし、フェイトも早々に本局の方面に行かなければならない。



喧嘩が双方には損しかもたらさないことを気がつかせたところで、

「わかったわ……」

「わかった」

アリサが冷めた口調で言い、フェイトも小声で言った。

「よし、終いや」

はやてがぱちんと手を叩くと、張り詰めた空気は再び緩んだものへと変わり、教室がざわつき始めた。

担任教師が遅れてやって来た。担任は喧嘩が収まったことを知ると安堵した表情を見せながらも、フェイトとアリサの二人を職員室へと連行した。

「はやてちゃん、ありがとう」

さすがが胸を撫で下ろしながら礼を言う。

「気にせんでおいて。どちらかが少しでも手を出していたら、止めるのは面倒なことになつてたと思うよ」

「ヴィータとリインの些細な——大抵は食べ物巡る——喧嘩の裁定をたびたび行なう、はやてにとって慣れたものであった。まだ、理性が残っているうちはお互いの不利益を説く。しかし、取っ組みあいにまで発展したら、話は面倒なことになる。」

手を出していなかったから、まだ二人とも理性が残っていた。そうでなかったら、力ず

くで止める必要があっただろう。

はやてはそつと溜息をついた。

アリサもフェイトも苛々しすぎだ。理由は言うまでもない。「なのはがない」という喪失であった。

職員室で二人は担任から軽い注意を受けた。二人とも出て行こうとすると、フェイトだけが引き留められた。担任は頭をぽりぽりと掻きながら小さな声で、

「最近、他の先生からな、授業中の態度が悪いは、ちよつと言い過ぎか。授業中、少しづつとして多いと聞いたんだ。何か、気になっていることがあるのか」

「いえ、特に……」

「そうか。悩み事があるなら、カウセリング担当の先生でもいいし、こつちにも相談してほしい」

担任は一気に言った。

「わかりました。もういいですか」

「あ、ちよつと待ってくれ。これを」

と言つて、フェイトにプリントの束を渡した。

「悪いんだが、帰り際に高町に渡してくれないか。うちは近所だったよな。彼女の体調はどうだ？」

担任は、家族から体調不良が続いていると聞いている。

彼はフェイトが養子であることは知っていた。それなりに複雑な事情が昔あったのだろう。もともと複雑な事情があるうえに、中学生という多感な時期だ。何かのきっかけでひどく塞ぎ込んでしまう生徒も、彼の今までの教職生活でたびたび見かけた。

そして、なのはと親友を通り越す以上と形容しても差支えがないくらい、絆が深い関係でもあることは知っている。彼なりの配慮であった。強い絆で結ばれている親友に会って、他愛のない話なり相談なりすれば、フェイトも少しは気分が楽になるだろう、という算段である。

下手に自分やカウンセラーが相談に乗るよりはずっと良いだろう。

フェイトはプリントの束を見つめて、硬直した。

「うん？ 聞こえているか」

「あ、聞こえてます。えっと、そこそこ良くなっているようですが、まだ充分じゃないそうですね」

フェイトはしどろもどろになって答えた。

「そうか。季節の変わり目だからな。悪質な風邪かかに罹かかることもあるんだらう。ハラオウンも気をつけろよ」

「はい、そうですね」

「じゃあ、プリントを頼む。長々と済まなかったな」

「はい、失礼します」

ようやく開放された。フェイトは一礼をして、そそくさと職員室を後にした。

戸を静かに閉めて、周囲を見廻した。先に開放されたアリサの姿は見えない。

談笑しながら玄関へ向かう二人組。部活へと急ぐのか小走りですぐ体育館へ向かう生徒。いつもと変わらない放課後がそこにあつた。

それとは無縁なフェイトであるが、急ぎ足で教室へ向かった。

既に教室はがらんとしていた。数名の生徒が残っているくらいだ。

すずかとはやてが心配そうな視線を向けてくる。

アリサはもう帰つたのだろうか、とフェイトは視線を廻した。

「えっと、アリサちゃんは、もう外に行つたよ」

すずかが言う。フェイトは外に視線を向けた。校門の門柱の脇にアリサが不機嫌そうに立っている。

「フェイトちゃん、気を悪くしないで。アリサちゃん、ちよつと苛々していただけだから」

フェイトは沈痛な面持ちで、

「うん、わかつてるよ」

と頷いた。

「あ、私は行かないといけないから。じゃあね」

「うん、また……明日」

「また、明日な」

すずかは小走りで教室から出て行った。

気がつけば、他の人間も教室から出て行ったようだ。

はやてとフェイトは黙ったままだ。その沈黙が気まずさをますます増幅させる。グラウンドから聞こえてくる、部活動に励む部員達の掛け声が耳朶に入った。

グラウンドを二人で眺めていると、小走りするすずかの姿が認められた。アリサのところまで駆け寄って、困った表情でアリサに話しかけている。一方のアリサはつんとした態度を保ったままだである。

ふとアリサはこの教室に視線を投げた。フェイトとアリサの目が合うと、アリサは目を慌てて逸らした。

そして、彼女はすずかを引く張るようにして、視界から姿を消した。

「皆、寂しいんだよね」

この沈黙を打ち破ったのは、フェイトであった。

「そうやね。それで苛々している、フェイトちゃんやアリサちゃんだけでない。すずかち

「やんも、そして、私も苛々している」

「アリスはもどかした。なのはが行方不明になった。それをやてとフェイトから聞いたときは悲しかった。だが、自分に力はない。はやてとフェイトに全権委任をするほかはなかった。」

「だが、座して待つというのは、彼女にとってあまり良いものでなかった。何もできない怒りが時間を経つにつれて、ふつつつと湧いてきたのである。だが、その怒りを認識したところで、やはり彼女にとって無意味なことであった。」

二人は並んで、学校を後にした。

「今日も変わらぬ澄み渡った青空が広がっている。丘を駆ける秋風はまさかと思うほど冷たい。」

「緩やかな下り坂をゆっくりと降りていく。」

「フェイトちゃん、今日も本局のほうへ？」

「うん、あ、でも、プリントを渡さないといけない」

「プリント？　なのはちゃんの？」

「フェイトは無言で頷いた。」

「ホームルームのときに頼めばいいのに。山崎先生はどこか抜けている人や」  
「フェイトは重い溜息をついた。」

病気で欠席している生徒の家にプリントを渡しに行く。何の変哲のないことだ。だが、本当のところ病気で欠席はしていない。当の本人はそこにいないのである。今もどこかの次元世界にいるのかもしれないし、あるいは機械のように感情を表に出さないまま輸送船を襲っているのかもしれない。全くわからない状況だ。

必然的に家族と顔を合わせる。それがフェイトにとつて重荷である。高町家に手ぶらで行くことは、非常に憚ることであるように思えた。

なのはの家族と会って、別に非難はされはしない。彼らはどつしりとした態度で、娘の帰還を持つ。かつて、なのはが落ちたときもそうであった。

それはよくわかつている。だが、行きたくはない。

逃げであった。逃げることは自分達のしている、なのはの搜索活動が望ましくない結末に向かうことを肯定することであった。

邪念を振り払うように、フェイトは頭を振った。

「あたしも着いて行っていいかな？」

はやてが提案した。

「いいけど」

「定期報告という感じで、家族の人に何か言ったほうが、向こうも安心するやろ」

「うん、そうだよね」

はやてが軽く笑うと、フェイトも微笑み返した。

焦る必要はない。気後れする必要はない。ピースは繋がりにかけている。一歩々々着実に行けばよい。フェイトもはやてもそう心に言い聞かした。

再び秋風が駆け抜ける。思わず身震いするほどであった。今着ている薄手のスクールベストではなく、厚手のスクールベストが欲しい頃合だ。

『——それでは、質疑応答に移ります』

司会がそう言うのと、手がいくつも上がる。司会は少し迷った素振りを見せて、一人の記者を指名した。

『クラナガン・タイムズさん』

指名された記者はすつと立ち上がって、声を張り上げた。

『襲撃犯の目的は判明しているのですか。どこまでわかっているのですか』

『——それにつきましては、調査中です』

広報担当の壮年の局員は淡々と言った。

『もつと具体的にお願ひできますか』

『各種事実を精査中でありまして、事実を公表できる段階にございません』



その記者はあからさまに不満げな面持ちになって座った。

再びたくさんの挙手。

『MBCです。犯人は「局員」ではないかという憶測がありますが、どこまで本当なんでしょうか』

エイリーはぎょつとした。犯人が局員なのか民間人であるのか、それは内外には公表されていいない。もつとも、警務隊が積極的に動いているから、内部に対しては犯人が局員であるかもしれないということは公然の秘密だ。

スクリーンに意識を集中する。

『まだ、事実を公表できる段階では——』

『ちよつと、さつきから同じこと言っているじゃないですか。ちゃんと質問に答えてくださいよ』

彼の指摘に対し、他の記者も同調するかのように野次を飛ばす。司会が制止を求めると、全く無意味だ。記者会見に臨んでいる、広報担当の局員は、しどろもどろになりながらも、『公表できません。ご理解ください』と言う。

彼自体は下っ端であるというのに、矢面に立たされる光景を見てみると、流石に同情心が涌いた。

そのようにしてスクリーンに注視していると同僚の隊員がやって来た。